

教育実践を通して子どもの「生きる力」を探る

第Ⅰ報 新宿御苑での自然体験の検討

大澤 力

(平成10年9月30日受理)

In Search of Children's "Zest for Living¹⁾" through

The Practice of Education

No.1 An Examination of Children's Experience of Nature in Sinjuku-Gyoen Park

Tsutomu OOSAWA

(Received on September 30, 1998)

Ⅰ はじめに

春の美しい草花とのふれあい、夏の太陽が燦々と輝くもとでの水遊び、秋の天高く晴れ渡った農園での収穫、冬の降り積もった雪との戯れなど、誰も幼い時期に自然とかかわった楽しい思い出を持っていることであろう。

先年、文部省の諮問機関から発表された「時代の変化に対応した今後の幼稚園教育の在り方について—最終報告—」にも、教育内容の改善に当たり重点とすべき事項として、「自然体験、社会体験などの直接的、具体的生活体験を重視すること」とあり、「園庭で植物を栽培したり、小動物を飼育して生き物の成長とともに体験するなど身近に自然を体験する機会」を充実することが必要であるとしている²⁾。また、「新しい時代を拓く心を育てるために」と題した中央教育審議会の中間答申が出されたのは平成10年3月31日であるが、その冒頭には<「生きる力」を身に付け、新しい時代を切り拓く積極的な心を育てよう>と高らかに謳い上げられており、その「生きる力」を身につけるための取り組みを社会全体ですすめていくべきであると述べている³⁾。

このような、幼児が自然とかかわることにより育つであろうとされる「生きる力」とはいったい何であろうか、また、幼児はどのように「生きる力」を獲得してゆくのかを実践の中から考察し、そこでの幼児教育の在り方を探ってみることが本研究の目的である。

なお、教育実践は筆者が講師としてかかわった新宿区立花園幼稚園における平成9年度の新宿御苑での自然体験および園での日常生活を取り上げたものである。

Ⅱ 新宿御苑を活用した生きる力を育む教育実践

新宿区立花園幼稚園では、近隣にあり都会としては自然に恵まれている新宿御苑を活用した教育活動を継続的に実施してきている(平成9年度は年間10回)。以下そのことについて報告するが、まず、花園幼稚園の概要から示したい。

1. 花園幼稚園の概要

1) 設置の地域等

東京の新都心新宿の繁華街に位置し、平成7年4月1日に区立2園を統合し花園幼稚園として開設された。

2) 園児数

平成9年度5月1日現在

	男	女	計
もり組(5歳児)	11	3	14
とり組(4歳児)	8	13	21
はな組(3歳児)	6	9	15
計	25	25	50

3) クラス数

3, 4, 5歳児 各1クラスずつ 合計3クラス

4) 教職員の構成

園長（小学校校長兼務） 1名，教頭 1名，
担任教諭3名 合計 5名

2. 新宿御苑遠足の概要

- 1) 新宿御苑は皇室の庭園として造られたが，第2次大戦後国民公園となり現在に至っている。広さ58.3ヘクタール，周囲3.5キロメートルであり，四季折々の自然とふれあえる都会のオアシス的存在として親しまれている。

園外の自然と親しみつつ教育内容を充実させることを目的に，2園が統合する以前から各園で御苑遠足は実施されていた。なお，花園幼稚園より新宿御苑までは徒歩5分程である。

2) 御苑遠足の実施月日

- ① 4月17日，② 5月1日，③ 5月28日，
④ 6月5日，⑤ 7月2日，⑥ 9月24日，
⑦ 11月18日，⑧ 12月3日，⑨ 1月20日，
⑩ 2月27日

合計10回実施

なお，年間を通した御苑遠足の観察記録と共に日常の教育活動や家庭・地域での子どもたちの姿も含めて，以下に記す3つの側面より状況をまとめつつ検討を加えた。

- ①御苑の自然と幼児のかかわりの年間表を作成
②御苑のあそびのポイントを地図として作成
③園内での研究保育時に調査対象とした子どもについて個人の成長を記録する

Ⅲ 実践状況と考察

1. ザリガニ釣りの活動に見られる子どもの「生きる力」

まず，全10回実施した御苑遠足の活動の中でも人気の高かった「ザリガニ釣り」について5歳児を中心に考察してみたい。

4，5月の段階では，子ども達がまだあまりかかわりを持たなかったザリガニであるが，6月に出掛けた折には，特に楽しみにしており前日からその話題で持ち切りであった。当日は天候にも恵まれザリガニ釣り日和で，ザリガニを釣り上げる際のM也とM男の竿と網を絶妙に使いこなすコンビネーションの良さが特に目立った。このコンビネーションの良さは食事やあ

そびなど日常の生活の中にも生かされている。また，ザリガニ釣りはじっと神経を集中して待つと同時に，掛かった時のスムーズな対応を要求されるという貴重な体験の場となっていた。

7月の遠足では，ザリガニ釣りが中心となる楽しい活動が多彩に展開された。その後の反省会で話し合われたことをまとめてみると，

- 1) 池の水が干上がっているうえにザリガニや魚が死んでいることで子どもは雨の大切さを実感した。
- 2) ザリガニ釣りでは，友達の動きを見て役割を意識していた。
- 3) 「釣りたい!」という強い要求，何とかしてあげたいという教師の思い，教師の言葉かけによって興味関心が持続したり，やる気がおきたりすることがわかった。
- 4) 釣るための道具の準備で竿にひもを「結ぶ」ことや餌をひもに「結びつける」ことができない幼児が多い。自分で環境にかかわっていくために必要なことであり，意識的に経験させていかなければならないことである。

なお，9月の遠足でも，子どもたちはザリガニ釣りが忘れられず草原での虫とりを楽しんだ後にうきうきと池（どんぶらこ）へ向かった。これまでの経験を生かしじっと待ちながら釣り上げる子が目立った。

ここで，教師が著した7月2日の活動記録を掲載する。毎回このような活動の読み取りを実施しているが，後述する考察を実施するためにザリガニ釣りの部分を中心として表1を掲載する。

次に，考察をさらに深め「生きる力」について考えてみたい。

文部省の諮問機関である中央教育審議会，その幼児教育部門の中心人物である河野が全国幼稚園教育研究協議会の研究紀要に「生きる力とゆとり」と幼稚園教育」と題した論文を掲載している⁴⁾。そこで河野は，「生きる力」の要素として3つの事柄を挙げている。第1は，主体的思考力と課題解決能力。第2は豊かな人間性。第3は健康と体力としている。そしてこれら3つの力を集約する形で「生きる力」を捉えている。ここから，最下層の基盤としての健康・体力（体），その上に豊かな人間性（心），最上部に主体的思考力・課題解決能力（頭）といった生きる力の三層構造が読み取れるのではないだろうか（表2）。

[illegible]

表2 ザリガニ釣りにおける「生きる力」育みの要因（体・心・頭の視点で）

対 象 児	体（体力）	心（心情）	頭（認識）
M 男	網使いの巧みさ	網役への自信	竿と網のコンビネーション
T 男	待てる体勢	釣れることへの希望	準備をしてじっと待つことの大切さ
S 男	釣れる体勢	一匹釣れたことの満足	釣れたザリガニの所有権
K 子	両手を使いこなす体勢	努力して釣れた満足感	工夫すれば必ずザリガニは釣れる

また、これらはペスタロッチのいう「手」「心」「頭」に対応する構造として考えられないだろうか。なお、村井は、手→身体、心→心情、頭→認識を対応させている⁵⁾。

M男は、ザリガニ釣りという遊びの中で、自分にとってやりがいのある網を扱うという手助け役を見出した。この喜びと充実感は何ものにも代えがたいものがある。網使いの巧みさという体の機能・網役としての自信という心の充実・竿と網のコンビネーションという頭での認識——こうしたものが重なり合い一つになった形でM男に生きる力が育まれているのではないだろうか。T男・S男もしかり、それぞれの活動の中に体と心と頭が重なり合い、一つになるなかで生きる力が育まれていると考えられる。K子は4歳児であるが、M男の認識した竿と網のコンビネーションを両手で竿と網を使いこなすことにより認識している。手助け役の教師がいなくなり、仕方なく工夫したことによる成果であった。そこから、自分一人で努力し釣れたことへ満足感が見出せるのである。体・心・頭はザリガニ釣りという活動の中で連携しつつそれぞれに機能しながら、生きる力としてその子どもの活動を支えたと共に次の活動へのステップとして存在しているものであろう。ザリガニ釣りという自然体験の価値に改めて感心する。

そこで、視点を広げ自然体験を通して育つものについて考察してみたい。山内が「幼児の自然教育論」で「自然の教育は、身近な自然とのふれあいの中で、幼児の情操を豊かにし、技能・技術を身につけ、自然のしくみを探求し、たしかな認識を育てることである。」と述べている。このことも「心」としての豊かな情操・「体」で修得する技能や技術・自然のしくみを探求しつつ確かな認識を獲得する「頭」ということにまとめられる。さらに「生きているものは、幼児たちのまわりにある自然の中で、最も親しみ易く、最も身近なものと保育の中では考えられている。幼児の自然教育の

内容として、最も多いものは、動物と植物とのふれあいを中心にした活動である。」としている⁶⁾。確かに、「生き物」であるザリガニとのかかわりは子どもたちの生きる力を育てることに貢献していた。

そして、ザリガニをも含めた生きているものすべてが「いのち」を有しており、食べものを取り、排泄し、成長し、やがて子孫を増やし、死んでゆく。これは、疑う余地のないことである。

先年、日本教育学会第55回大会において「いのちの大切さをどう教えるか」という公開シンポジウムが催された。「生きる力」を考えると、「いのちの大切さを教える」ということは「生きる力」を育むことの根本的な事柄として位置付けられないだろうか。討論の司会とまとめを担当した岡田は、人間形成としての教育すべての根基をなすべき問いであるとした後、全体討議に移るにあたり基本的問題を次のように絞っていた。

- (1) そもそも「いのち」——正確には人間のいのち(human life)——とは、どのような位相を含みもつ「いのち」なのか。
- (2) 「いのちの大切さ」を教えるとは、一体どういうことであり、その際の方法は。

ここで注目すべきは(2)である。まず、「いのちの大切さ」を教えることはむろん不可能であるとしても、それを「気づかせ」「想起させ」「感得させ」することは可能である。そのことは「覚醒」(Erwäcken)と呼ばれるものであり、意図的・計画的な教育には必ずしも馴染まないが、覚醒が最終的に起こりうる前提条件や必要条件となる以下の2つのことは予め準備することができるとして、

- ① 「いのち」に関する個々の子どもの素朴な原体験とその際の感動の積み重ね
- ② さらに①を客観的に根拠づけたり、意味づけたりする知識や知見を整えてやることを挙げていた⁷⁾。

表3 ザリガニ釣りにおける「生きる力」育みの要因

(子どもの素朴な原体験・教師による客観的根拠、知識の伝達の視点で)

対 象 児	子どもの素朴な原体験の様子	教師による客観的根拠、知識の伝達
M 男	巧みに網を使いこなす	巧みさの模範を示す、称賛を与える
T 男	最後まで努力してとうとう釣れた	餌のスルメが良いと励ます
S 男	自分の欲求をがまんすること	共有の説明をする
K 子	両手を巧みに使い釣り上げた	釣れたことへの称賛を与える

表4 S男(3歳児)の年間成長記録(日々の保育と御苑遠足での行動との対応)

< 日 々 の 保 育 >	< 御 苑 遠 足 >
ブロックのあるジュウタンにすわり、T男の動きを目でじっと追っている	石をどかして虫を探すというT男がやった活動をじっと見ている
↓	↓
一日一回はブロックであそびをする。友達や遊んでいる遊びに入ることもできるようになる	「ここきた」「これやったね」と自分で石をひっくり返そうとする
↓	↓
電車ごっこを好み遊ぶ時間が長くなってくる K男と仲良しになる	K男のまねをして坂でころがったり、教師について草むらに入りバツを覗き込んで見る
↓	↓
体を動かして遊ぶこと、友達と一緒に遊ぶことに積極的に 園生活全般に活気がでる	石をどかしダンゴムシにさわって持つなど、自分から興味のあることをやれるようになった、遠足が楽しみ

表5 S子(4歳児)の年間成長記録(日々の保育と御苑遠足での行動との対応)

< 日 々 の 保 育 >	< 御 苑 遠 足 >
テラスのウサギが心のよりどころとなっている 友達の遊ぶ様子を手を後ろに組んで見ている	はじめて見ることに、触れることに驚きがたくさんあった
↓	↓
テンポの合うF子と二人で水遊びを楽しむ 巧技台でF子・M子と三人で遊ぶ	先生や友達を誘って自然を探ることが好きになる
↓	↓
ゆっくり自分のペースで日常生活が送れるようになる	友達に頼んで捕まえてもらった虫を大事に持ち帰る
↓	↓
体を動かして遊ぶこと、友達と一緒に遊ぶことに積極的に 園生活全般に活気がでる	雪・氷など冬の自然遊びの楽しさを味わう、歩く足取りがしっかりし、見通しをもって行動できるようになる

表6 R男(5歳児)の年間成長記録(日々の保育と御苑遠足での行動との対応)

< 日 々 の 保 育 >	< 御 苑 遠 足 >
S君とのかかわりを基に、友達や遊びが広がる 友達と一緒に遊びをつくる楽しさを感じる	友達の動きを通じて、自然に対して興味や関心をもつ
↓	↓
抵抗感のあることに対して自分のペースで楽しむようになり、課題活動も積極的になる	自然に対して自分からかかわってゆく楽しさを知る
↓	↓
友達の姿に刺激されて挑戦意欲が出てくる	自分の目で手で探る意欲が出てくる 友達と触れ合って遊ぶことも楽しい
↓	↓
幼稚園の自然にも目を向ける 友達に思いやりの気持ちを行動で表す	自然の中で思いっきり遊べるようになる 人や物にも積極的にいかわり楽しむ

そこで、前掲のザリガニ釣りの活動を①②に沿って再び分析してみる(表3)。

M男は道具である網を巧みに使うという素朴な原体験を教師の行動から学び、試行錯誤の末M也との絶妙なコンビネーションを見出した。そのことへの称賛を教師ははじめ友達からたくさん受けることによりM男の網使いとしての感動はさらにゆるぎないものとなっていった。T男の場合は教師の言葉掛けが客観的根拠となり彼のザリガニを釣り上げるという体験へ寄与していた。みんなのために、ザリガニを獲得することをがまんさせられたS男にとっては、不満足であったもののがまんするという貴重な原体験になったと思われる。

K子は両手を巧みに使うということを見事に乗り越えていた。このように素朴な原体験の積み重ねは、着実にザリガニ釣りという自然体験のなかで育まれているのである。

2. 子ども(3・4・5歳児)の一年間の成長に見られる「生きる力」

次に、御苑遠足での自然体験と日々の保育とのかかわりをS男(3歳児)・S子(4歳児)・R男(5歳児)の一年間の成長記録をもとに分析してみたい(表4・5・6)。

S男に関しては、T男を視線で追うという一方的かつ消極的なやり方であった。

そんな、彼も御苑での石をどかして虫を探すという活動に触発されて様々な変化を現わしてくる。次にK男が登場し仲良しになるが、この関係は一方的なものではなくお互いのかかわりが尊重される方向へ展開してゆく。しだいに、S男の活動も広がりをもせ初め年度末には積極的な姿が目立つようにもなった。

S子はウサギとのかかわりに心の安定を求めている。しかし、御苑遠足に参加して見たり触れたりしたことの影響の大きさは計りしれないものがあつた。ここから彼女の変化が始まり、F子との水遊び・F子やM子との巧技台での遊びなど日々の保育での広がりがはっきりしてくる。そして、体を活発に動かし、友達も増え、御苑遠足でも見通しをもった行動がとれるようになってきていた。

R男はS男とのかかわりが基となり生活が広がっていった。御苑の自然とのかかわりもまわりの友達からの刺激を基に広がってゆくが、徐々に自分自身の楽しさを見出し終いには友達を巻き込んで積極的に遊べる様にもなった。

ていた。

生きる力は各人各様、様々な展開をみせて子どもたちのなかで育まれている。しかし、先のザリガニ釣りに見た、体・心・頭の重なり合ったところでの教育実践、素朴な原体験とそれを客観的に根拠付け、知識を用意するという教育の配慮は重要なポイントとなっており、今後の生きる力のさらなる発展にも欠くべからざるものであろう。

3. 教育に携わった教師たちの感想に見られる「生きる力」

教育を実践した各担任のまともに貴重な示唆を見出したので以下に示す。

3歳児(はな組)

御苑に行くとき一人一人がキラキラ輝いています。「みたい!」「さわりたい!」「もちたい!」「つかってみたい!」など自分の目、自分の手足、自分の耳、自分の鼻で感じています。その一步一步が自然の美しさ、不思議さなどから、自分の楽しみを見出し、将来生きてゆく時の心のよりどころになれば——と考えています。

みたい!さわりたい!もちたい!つかってみたい!これらすべてが原体験につながっているものである。S男の石をどかして虫に執着した姿——そこにこの典型があらわれているのではないだろうか。

4歳児(とり組)

初めは大きな自然の中でどうしようか戸惑っていた子ども達も、自然に慣れ、親しみ、積極的に動けるようになってきました。そして、友達の動きや年長児からの刺激を受け、自分から「なんだろう」「いってみよう」「みてみよう」「さわってみよう」と意欲的な姿がみられるようになってきました。自分の動き、言葉、感性で自然にかかわり、体をまるごと預けて、のびのび楽しんで欲しいと願っています。

確かに、小さな体の4歳児には、60ヘクタールの自然は大きすぎることであろう。しかし、その大きさも通ううちに次第に慣れ親しみ、自分のものにしていってしま

う子どもの素晴らしさ、これこそが、生きる力の源泉ではないだろうか。この源泉を育て上げるには是非、「自分の動き、言葉、感性で自然にかかわり、体をまるごと預けて、のびのび楽しむ」ことが必要なのだと思う。

5歳児（もり組）

「どうしてなんだろう?」「これはどうなっているんだろう?」と今までの経験をもとに見たり考えたり試したりするようになります。また、一人の興味・関心が友達へと伝わり、みんなで考えあうということも特徴になります。このように自分から環境に働きかけて自分の興味・関心を追及しようとする知的好奇心の芽を十分に伸ばすことが大切。また、次第に自分以外のものたちにも目を向けるようになります。自分だけじゃない、木も草花も虫も鳥もみんな生きている。そして、それぞれの生き方をしていることを認識します。このことは互いの生命を尊重し合うことにもつながる大切なことです。

R男の成長を見てみると自分一人からみんなへの広がり、友達の刺激を受け取っての自分の深まり。この両者が渾然一体となりつつ、体・心・頭が育まれ、原体験が次々と展開されていっているように思われる。

まとめの終わりは、「私たちは園長先生をはじめみんな新宿御苑が大好きです。いつもたくさんを発見をし心を揺り動かされています。驚きは、何よりも新鮮な心から生まれるといえます。この新鮮な心、感じる心を持ち続けて、研究を進めていこう」という一文で締めくくられている。この教師全員が御苑の自然が大好きであり、子ども達が大好きであること、さらに新鮮な心、感じる心を持ち続けたいという態度がこのような花園幼稚園における生きる力を育む教育実践を支えていたことを今さながら確認したものである。

IV おわりに

教育実践から「生きる力」を探ってゆくことは、根気のいる時間の掛かるたいへんな仕事のように思われる。しかし、ひとつひとつの実践の中にこそ、子どもが育つという現実の重さが潜んでいる

ペスタロッチはいみじくも「生活が陶冶する」と名言を残している。

今回は花園幼稚園の先生方の御協力により、新宿御苑での自然体験を検討する機会を得られた。心より感謝申し上げる。今後さらに様々な実践を重ね、教育学会のシンポジウムで提起された「気づかせ、想起させ、感得させることは可能である。そのことは覚醒(Erwecken)と呼ばれるものである。」という「覚醒」について実践を通して掘り下げるつもりである。また、今回は園周辺の新宿御苑を扱ったが、もっと身近な園内の自然とのかかわりについても研究してみたいと考えている。

なお、本研究は第57回教育学会で発表したものに加筆・修正したものである。

引用文献

- 1) The Department of Education, Central Council for Education, 1997, The model for Japanese education in the perspective of the 21st Century(2nd Report), P1.
- 2) 河野重男, 1997, 「生きる力とゆとり」と幼稚園教育, 全国幼稚園教育研究協議会研究紀要46号, P6~10.
- 3) 文部省, 中央教育審議会, 1998, 新しい時代を拓く心育てるために.
- 4) 文部省, 時代の変化に対応した今後の幼稚園教育の在り方に関する調査研究協力者会議, 1997, 時代の変化に対応した今後の幼稚園教育の在り方について—最終報告—.
- 5) 村井実, 「いま, ペスタロッチを読む」 P130, 玉川大学出版部
- 6) 山内昭道, 1981, 「幼児の自然教育論」 P73・95, 明治図書, 東京.
- 7) 日本教育学会, 1997, 第55回大会公開シンポジウム「いのちの大切さをどう教えるか」, 教育学研究第64巻第1号, P16~30.

Summary

The purpose of this study is to search for Children's "Zest for Living", which is composed of such factors as body, heart and head, through observing their experiences of Nature.

Hanazono Kindergarten's children had some experiences of coming in contact with Nature in Shinjuku-Gyoen Park in 1997. We examined their experience of catching crayfish and the record of their growth in the year.